

シンポジウムⅡ 「在宅チーム医療における在宅医と在宅薬剤師の新たな連携」
～医師は薬剤師に何を期待し、何を求めているのか～

15:30～18:00 第1会場：大ホール

座長	狭間 研至	一般社団法人日本在宅薬学会 理事長
演者	長尾 和宏	医療法人裕和会 理事長 長尾クリニック 院長
	吉澤 明孝	医療法人社団愛語会 要町病院・要町ホームケアクリニック 副院長
	加藤 泰司	医療法人優仁会 かとう整形在宅クリニック 院長
	城戸 哲夫	思温クリニック 外科員
	木内 祐二	昭和大学薬学部薬学教育学 薬学教育推進室 教授
	西村 元一	金沢赤十字病院 副院長

総合司会 井手口直子 帝京平成大学 薬学部 教授



薬剤師さん、書を置いて街へ出よう

演者

ながお かずひろ
長尾 和宏

長尾クリニック



医師になって30年が経過した。大変失礼ながら、今ほど薬剤師さんが必要だ、頼りになると感じたことが無く過してきた。外来診療ではジェネリック問題や服薬管理や禁煙指導、一方在宅医療では多剤投薬の減量、麻薬の服薬指導、胃ろう栄養など薬剤師さんのお世話になりっぱなしの毎日である。

超高齢化と多死社会を乗り切るためには、「地域包括ケア」しかないのが国の結論である。しかしそれをまだ理解できない医療者が多い。薬剤師さんと同様であろう。これから10~15年の激動の時代を乗り切るためのキーワードは、どこまでいっても「地域」であろう。しかし薬剤師さんにとっての「地域」とはどこか?薬局の中?それとも外?

街へ出る薬剤師と、出ない薬剤師に大別されてくるだろう。街へ出ると今まで見えなかったことが沢山見えて、面白くて(?)仕方がない。もし面白いと思えないなら、これからの医療者としては厳しくなるだろう。

がんと認知症の時代である、と思っている。2人に1人はがんになり3人に1人はがんで死ぬ。一方、現在予備軍も含めて860万人と発表されている認知症も近い将来、2人に1人になると想像している。いずれにせよ、今後の在宅医療の主役は、訪問看護師、歯科医、そして3番目は薬剤師であると思う。3番目は残念ながら、少なくとも医師ではなさそうだ。薬剤師さん、書を置いて街へ出よう、と今こそ言わせてください。

■ 略歴・職歴

医療法人社団裕和会理事長、長尾クリニック院長、医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、関西国際大学客員教授、東京医科大学客員教授(高齢総合医学講座)

■ 著書

「平穏死・10の条件」(ブクマン社)、「抗がん剤・10のやめどき」(ブクマン社)、「胃ろうという選択、しない選択」(セブン&アイ出版)、「平穏死という親孝行」(アーススターエンターテイメント)、「がんの花道」(小学館)、「家族が選んだ平穏死」(祥伝社)、「医療否定本に殺されないための48の真実」(扶桑社)、「ばあちゃん、介護施設を間違えたらもっとボケるで!」(ブクマン社)、「平穏死できる人、できない人」(PHP社)など多数

■ 医学書

スーパー総合医叢書全10巻 総編集(中山書店)
第一巻「在宅医療のすべて」は既刊